
桜の言い伝え

昴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の言い伝え

【Nコード】

N6622R

【作者名】

昴

【あらすじ】

卒業シーズンだったので：
レンに頑張ってもらいました
駄文ですが読んで頂けるのならよろしくお願いします
注意！リンとレン：ミクとミクオは家族ではなく同じ名字なだけという事になっています

プロローグ（前書き）

我慢できず…勢いで書いてしまいましたorz
駄文ですがよろしくお願い致します…

プロローグ

学校のアリーナ：舞台の上では校長先生がさっきまで長々と話していた

そして：もうすぐ式が終わる：終われば3年間いた校舎ともお別れでも、それは君と会えなくなる事も意味していた

幼稚園から高校までずっと彼女と一緒にだった

しかし、4月からはお互い違う大学に通う：

昔から仲のいい幼馴染：彼女は何時も笑っていて

その笑顔が眩しいと思っていた

そんな彼女を好きになっっているのだと気が付いたのは中学の時

でも、気が付いても告白する勇気がなかった：

今の関係を壊してしまうのではないかと思うと怖いと言えない

それは今でも変わらない：

だけど自分の想いは伝えて別れたい：

そんな矛盾が卒業式の間：自分の中で渦巻いている

今思えば：彼女に告白する機会は誰より多かった筈だった

彼女とはよく親しく話していたし：

よく二人で一緒に勉強を教え合っていたのだから：

その機会を使わなかったのは紛れもない自分自身：

過ぎた事を悔やんでも仕方がない：

（同じ名字でも：ここまで違うか

昔はよく双子とか言われてたのに：それは今もあまり変わらないか）

それを思うと笑えてくる：彼女と自分は姿形は瓜二つなのに性格は全く真逆だなと：

教室（前書き）

えっと…レンとミクオが出てきます
駄文ですが読んで頂けるのならよろしくお願い致します

教室

式が終わる今は一人教室：窓側へ行きずっと遠くを見ている
空の水色と桜の淡い色がとても綺麗だと思えた：

（もう：終わったな

結局、伝えられずに終わるか：）

そう思いながら目を閉じた：

脳裏にさっきまで眺めていた景色が浮かぶ

「レン：」

名前を呼ばれ振り向くとそこには中学から見慣れた顔が居た

「クオカ：何か用？」

そう言うのとミクオは眉を顰めた

「レン：お前このままでいいのか？」

リンに自分の気持ちを伝える事もせず：

ミクオにそう言われ俺は苦笑いしながら窓から離れた

「そう言うクオだっ」「俺は伝えてきたぞ：

ミクオは俺が全て言う前にそう言った：

ミクオの目には驚いた表情をした自分が映っている

「悪いな：お前に言っただけだ」

俺は：前から今日まで告白しないって決めてたから

今朝：話があるから、と呼んでたんだよ

だからついさっき：ミクに自分の気持ちは伝えてきた」

クオはポーカーフェイスを装っているが微かに耳が赤い

それを聞いた俺はミクオに何を言えいいのかわからなかった：

どうやらミクオの様子から振られた訳ではなさそうだ：

ミクオは何も言わない俺の頭をポンポンと叩いて教室を出ようと踵
を返した

それを見て俺が再び外を見ようとするとミクオが

「ああ：告白した時にミクから聞いたんだけどな：リン：誰かを待ってから帰るって言ってたらしいぞ」
そう言った

ミクオの声に思わず反応し振り返ると「じゃあな？」とだけ言っ
てミクオは出て行った

廊下にミクオの足音が微かに響いていたが階段を下りて行く音がし
て段々と消えていった

暫くしてから：外の景色を見た

さっきと変わらない空と桜の色彩がそこにはあった

教室（後書き）

んゝ…ミクオのキャラわからない W
W W W
こんなのでよかったのかな…うゝん

待ち人（前書き）

サブタイトルを付けたりするのが大の苦手ですO r Z
本当に誰か助けて：

待ち人

はぁ…と溜息を一つ吐いてから駄目元でリンの教室へ行ってみる事にした

リンの教室までそんなに距離は無い筈なのに

自分の足取りがとても重くて何時もより息苦しく感じる…

（クオの奴…リンに何て言えって言うんだよ…

今までずっと親友とかそういう関係を崩して来なかったのに

もし…告白して関係が崩れたら、と思ったらそれが一番怖いんだよ！

それにリンが待っているのは俺とは限らないだろ…）

そんな事を考えつつも目の前にはリンのクラス

少し迷いつつも教室の扉に手を掛けて引いた

そして中に入ると静かに何か本のページを捲っているリンが居た

どうやら集中しているらしく彼女は俺に気が付いていない…

「……………リン」

俺は何時もと同じ様に呼んだつもりだが微かに声が震えていた

そんな事にも気付かず彼女は「あ、レン…もう帰ったのかと思った」

と言って

さっきまでページを捲っていた物を閉じて自分の鞆に入れた

「どうしたの？レン…帰らないの？」

リンは入口から動かない俺を不思議に思ったのか心配そうな顔をしている

俺は「え！いや、何でもない…リンは帰らないの？」と聞き返した

「私？レンが来たから帰るよ？」

そう言ってクスクスと笑いながら鞆を取って近くに来た

「さ、帰ろ？」そう笑顔で言って教室を出て行った

俺は驚いてリンの後を追った

待ち人（後書き）

やっとりんに登場してもらいました！

まあ…名前しか出てこない子がいるんですけど…

ごめん…としか言えませんが orz

告白

どうやらリンには寄りたい場所があるらしい：

学校を出た時に「少しレンと行きたい所があるけどいいかな？」と言ってきた

どうしたのか、と聞けば「レンとまだ今年は桜を見に行っていないから」との事：

（そっか毎年：桜並木とか見に行ってたっけ）

そんな事を考えているとどうやらリンが行きたかった場所へ着いたらしい

暫く桜並木を歩いていると目の前に一本：歌に出てきそうな見事な桜があった

その桜は今まで見てきた他の桜と何か雰囲気のような物が違っていたリンはその桜を見て驚いている俺を見て笑っている

「凄いでしょ？この前：偶然見付けたんだ」

レンも知らないと思ってここ来たかったの」

そう言ってリンは桜に近付く

実を言うところこの桜の樹の存在は話で聞いていた

出来れば何時かリンと来てみたいとも：

これ程まで見事だとは知らなかったけれども：

（でも：ここならいいかもしれない幸い俺とリン以外誰も居ないたとえリンに振られたとしても：）

そう思っリンの名前を呼ぶ

リンは呼ばれたから振り返った

「リン：俺は昔からリンの事が好きだったんだ：」

俺の言った事にリンは「え？」と驚いた表情をしている

「だけど：俺はリンとの関係が崩れるのが嫌で：

リンに自分の気持ちを伝えるのが怖かったんだ：

だから：俺と「いいよ：」

リンは俺が全部言う前に答えた：

彼女の瞳にはかなり驚いている自分がいる

リンは少し顔が目の前にある桜の花びらの様な淡い色をしている

それは恐らく自分も同じ：

彼女の瞳に彼女と似た様な顔色をした自分が映っていた

告白（後書き）

えっと…二人の性格が分からなくなってきました…

気持ち

「だいぶ前から…」

そうならいいなと思ってた」

リンはまた桜の方を見ながら言った

「私もレンが好きだった…」

だから誰かに告白されてもずっと断ってた

ミクと同じ様にね？」

そう言ってリンは風で落ちてきた桜の花びらを手に乗せた

「初音と同じ様に？」

「うん…ミクとクオ君は両思いだったんだよ

ただ…クオ君がなかなか自分の気持ちに気が付かなかっただけで…

ミクによればクオ君は卒業式まで言わないつもりだったって聞いた

私は私で…レンに対する気持ちに気が付かなかったけど…

気が付いたのは中学の時だったかな…だんだん身長差が出てきた時

位だったと思う」

リンはそう言って掌にある桜を空へ飛ばした

「私もレンと同じ様に…告白する勇氣はなかったし

今までの関係が崩れるのが怖かった…だから何も言わなかった」

そこまで言ってリンは桜から目を離し俺の方へ向き直った

目には微かに涙が溜まっている…

「だから…本当にさっきのは…嬉しかった

私もレンも同じ…気持ちなんだって…」

そう言ってリンは抱き着いてきた

驚いたがおそらく彼女の事だ泣き顔を見られたくないのだろう

だからそのままリンを抱きしめた

リンは声を出さずに涙を零している

俺はただ「言うのが遅くなってごめんな？」とリンに謝る

リンは頭を横に振るだけで声は出さない

「ずっと…一緒に居てもいいのかな」

とリンが今にも消えそうな細い声で言ってきた

「いいよ…少なくとも俺はリンが傍にいて欲しい」

そう言ってリンを少し強く抱きしめた

気持ち（後書き）

んゝ…二人のキャラわからなくなった
本当に…

言い伝え（前書き）

これがラストです…

書いた私でも何故こうなったとしか言えません…

言い伝え

暫く泣いていたリンが「急に抱き着いてごめん」と言って離れた
目は潤んでいたが表情は嬉しそうだった

「いいよ……落ち着いた？」

そう尋ねると「うん！」と満面の笑みで返してきた

そしてまたリンは桜を見上げている

そんなリンに俺は少し悪戯をしようと思った

昔は遊びでよくしていた事だし告白するより簡単だったから

俺はリンの名前を呼んでリンが「何？」と不思議そうな表情で

俺の方に振り向いたリンを引き寄せてそのまま自分の唇を彼女の唇
を重ねた

「?!~~~~~」

少し経ってからリンを驚かすには少しやり過ぎたか、と思いながら
リンを離れた

リンは恥ずかしさからなのか何も言わずただ顔をさっきと同じ様に
頬を桜色に染めていた

俺は笑いながら「ケーキでも食べに行こう？」と言ってリンに手を
差し出す

リンは「レンのバカ……」とボソツと呟いて俺の手を握った

丁度……少し強い風が吹き桜の雨が降っていた

その雨の中をリンと一緒に歩いて行った

ただ二人は知らない事が一つだけありました

昔……訳あって一緒になれなかった男女がいました

その二人が初めて会ったのも最後に会ったのもこの桜の下で
最後に会った時……

女性は「貴方だけを想って生きていくために何もかも捨てたい」と
言いました

しかし男性は「貴女だけ想って生きていくために何もかも捨てる事
は許されない

でも、ここでお互い誓いを立てる事は出来る」と言い

一緒になる事は出来ずとも二人が巡り会った桜の樹の下で

『死後：また巡り会い共に生きて行こう』と二人は誓いました

二人の死後：その二人の事は風の便りで伝えられました

人々は『二人は来世で再会し結ばれた』と言いました

以来：この桜の樹の下で誓った事や約束は

必ず叶うと言い伝えられているのです：

言い伝え（後書き）

読んで下さった方：ありがとうございます

そしてお詫び申し上げます：

うん：慣れないね：こう言うの：

そして最後の部分：気付いた方がいれば「え？これって：」

程度に思っていて下さい：一つは分かりやすいですが：

地震が起きたのにこんな書いてもいいのかなとは思いましたが：

少しでも：明るい物を書きたいと思い書いてしまいました：

本当に申し訳ありません：

一刻も早く落ち着く事を祈っています：

さて！募金してこよう！読んで下さった方も募金するなら

募金はユニセフではなく赤十字にして下さい！

ユニセフは手数料か何か取られてしまうので！

有名な話なので書く必要ないとは思いますが一応です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6622r/>

桜の言い伝え

2011年6月5日01時27分発行